

# 「もみちにたてて」再考

## —『きのふはけふの物語』の場合—

仙波 光明

### 0. はじめに

東の奥より都にのぼったひとが、「お茶をもみちに点てる」とは「濃う良う（紅葉）」たてることだとの説明を聞き、故郷に帰ってから「濃く良く」と説明して失敗するという醒睡笑の話は、当時の東国では形容詞ウ音便が使われない傾向が強かったことを証言する話として知られている。一方、『きのふはけふの物語』の場合には、東国の人は無関係であり、都（あるいは上方）の人物の話として読まねばならない。ウ音便を使わずに失敗した、この話が都の人物の話として成立したのはなぜであろうか。これまでの注釈では、『醒睡笑』を引き合いに出すだけで、このような視点からの見方を消極的にせよ示したものはなかったように思われる。

この小論では、次のようなことを述べる。

『きのふはけふの物語』の「もみちに点てて…」の話は、

- ① 京の中での出来事と考えて解釈を試みなければならない。
- ② 都の人間が、もったいぶった大袈裟な物言いをしようとして失敗した。
- ③ この話でも、音便形と非音便形は、文体の相違を示すものとして機能している。
- ④ 漢語の使用も文体指標として機能し、話のおかしさを強化する役割も果たしている。

### 1. 天理図書館蔵古活字十行本の場合

現存する『きのふはけふの物語』（以下、『きのふ』とする）のうち最も古いと目されている天理図書館蔵古活字十行本の本文（嚙本大系による）をまず見ておこう。分かり易くするために表記を変えて示す。

A ある人寺へまいる。長老さま出相たまひて、寄特の御詣り、まづまづ御茶参らせよ、もみちにたてて参らせよと仰せらるる。客聞いて不審す。もみちには何事にて御座候と申。こうよう（濃う良う・紅葉）と申心にてと答へらるる。もっともとて感じて、この人客を得たらは、是を言ふて一つこばさうと思ひて、巧むおりふし、さる人尋ねらるる。御尋かたじけなく候、まづ御茶参らせよ、もみちにと言ひつくる。案のごとく不審して問ふ。濃く良くと申義理ちやと言はれた。

この本文では、「ある人」がどこの育ちか、どこに住んでいるのかは示されていない。読者が『醒睡笑』の咄を知っていれば、「東の国」の人と思って理解するかもしれない。一方、「ある人」を上方の人間として読まなければならないという根拠もまた無いとも言える。しかし、寺の長老（住職）が、「濃う良う」という形容詞ウ音便を使っていることから、話の発端は都、すくなくとも上方であったと見ておくのが妥当であろう。また、小さな相違ではあるが『醒睡笑』では、「態とちか付の友を呼」んでいるのに対し、「ある人」は客の来訪があつたら「こばそう」として待ちかまえているだけである。その客に対して「御尋かたじけなく候」と形容詞の非音便形を使っている点には注意しておきたい。非音便形の使用は「濃く良く」だけではないのである。

ところで、この時代の形容詞ウ音便／非音便形の使用については、『ロドリゲス日本大文典』の次の記述が参考になろう。

○ Ay（アイ）、Ey（エい）、Iy（イい）、Oy（おい）、Vy（うい）に終る形容動詞において、Yô（良う）、Amo（甘う）、Nuru（緩う）などの如く、ô（おう）o（アう）、u（ウう）に終る語根の変わりに、Xiroqu（白く）、Nagaqu（長く）、Mijicaqu（短く）などの如く書き言葉の Qu（く）に終る形を用ゐる。（関東または坂東）

この記述は、それが「関東または坂東」のところにあるために、16 世紀後半の関東で形容詞のウ音便が使われていなかったことを証言するものとして利用されてきたように感じられる。形容詞の連用形にウ音便を使うかどうかは、日本語を東と西に分けるときの指標の一つであり、ロドリゲスはそれを

支持してくれるからである。しかも、いつの間にか、近畿圏およびその周辺、そして西日本では形容詞ウ音便を使うのが普通であり、そうしないのは共通語の影響を受けて言語体系が変化したためだと考えるようになっているようにも思われる。

しかし、視点を変えてロドリゲスの記述を読み直してみると、都において、少なくとも書き言葉としては非音便形が使われていたことが述べられていることに、今更ながら気づかされる。ここから当時の都において、場面によっては口頭語でも形容詞連用形に非音便形が現れていたことを想像することができる。

あらためてAの本文に戻って考えてみよう。「ある人」は客を迎えての挨拶に「御尋かたじけなく候」と述べ威儀をただすかのような応対をしている。虎明本狂言においてこのような場合の挨拶が「かたじけなふござる」のようにウ音便の形をとっていることを見ると、この「ある人」が緊張した物言いをしていることが想像できる。「濃く良く」と言ってしまったのもいささか無理をして威厳をもって話そうとしたためであつたろう。「もみち」の説明をする際にも、長老が「こころにて」と和語を用いているのに対し、「ある人」は「義理ぢゃ」と漢語を用いているのも、それをうかがわせる。なお、このような場面での形容詞原形の使用については、北原（1973）にすでに下記のような指摘がある。

会話文の中に（形容詞の）原形が用いられるのは、

- i 話し手が威厳をもってかまえている場合(話し手が高齢者の場合が多い)
  - ii 話し手が聞き手に距離をおいて他人行儀になっている場合
  - iii 話し手にとって聞き手が偉い人のため、話し手がかしこまっている場合
- などが多いということができそうである。

北原（1973）

Aにおいて「ある人」がことさら威厳を示そうとしたのは、「もみちにたてる」という言い回しを知っていることを自慢するためであり、そのために

普段言い慣れない言葉遣いをして失敗したということであろう。威儀を正した振る舞いをする場では、日常の口頭語であるウ音便の形は避けなければならない言い方であった。

## 2. 大英図書館本以降の本の場合

次に、天理図書館蔵古活字十行本に続く、大英図書館本を見てみよう。ここでも読みやすさを考慮して翻字したものを示す。なお、大英図書館蔵古活字十行本に続く、刈谷市立図書館蔵古活字八行本や大東急記念文庫蔵古活字十一行本も大英図書館本と重要な変化はないので、いちいち触れることはしない。

B ある人寺へ参る。長老御覧じて「<sup>きてきてきどく</sup>扱々奇特の御参詣」とて請じ給て、

「まづまづ茶進上申せ。もみちにたてて参らせよ」と仰せらる。<sup>この</sup>此人聞て不審していろいろ案じて済まず。いやいや問ふは一たんの恥と思ひ、長老様に問ひ申せば「こうようと申心にて」と仰せける。「もつとも」と感じ、帰るさに知る人の所へ立より、かの事言ふべしにて「御ちや一服たまはれ」と言へば、「心得たる」とて台子に向かひければ、「もみちにたてて御意にかけられよ」と言ふ。亭主も小性も合点行かず、「いかなるいはれぞ」と尋ければ「こくよくと言ふ義理ちや」と言われた。

Aに対してBでは、「ある人」は自分の家へ帰る途中で知人のところに立ち寄る。しゃれた言い方を覚え、すぐにでもそれを披露しようとしたことになっているのだ。「ある人」は都に住んでいる人物だと受け取るのがもっとも自然であろう。もちろん、「ある人」は東国から都へ上って滞在中であり、宿へ帰る途中に知り合いのところへ立ち寄ったと考えることもできるかもしれない。しかし、そのように考えなければならない根拠は見当たらないと言えよう。（『醒睡笑』では「東の奥より都にのぼりたる人」「本国に帰り」と書かれている。）

ところで、Aには使われておらずBに現れる表現として「御意にかけられよ」の存在を指摘しておこう。この表現に対して、岩波古典大系の頭注では「御いづかい下さい。宜しく願います。」とし、東洋文庫の現代語訳では「もみちに点ててくだされよ」としているだけである。両者共に重要な点を見落としているように思われる。それは、「御意」の主体である。『日葡辞書』によれば、「御意ニカケラルル」とは、「貴人が私の家においてになる、または、私に或る物を下さる」の意であり、これが通常の使い方であるならば、「御意」の主体は身分の高い人であり、少なくとも目上の存在でなければならぬだろう。寺参りの帰りに急に立ち寄ることができる相手であったかどうか。

念のために、『きのふ』（大東急記念文庫本）で「御意」がどのように使われているか確かめておこう。下に示すように「御意」の主体は、将軍 ① ②、高僧 ③、医師 ④、養父 ⑤、奉行 ⑥、僧侶 ⑦ となっている。①～③は貴人と呼ばれるにふさわしい人物であり、④⑥はある種の権威を持つ人物であろう。それに対して、⑤は親とはいいいながら子から大切にされているわけではない。⑦の僧侶に対しては客と見た上での待遇である。

- ① くわうけんみん殿の御時、有上人、一段と御ゐに入給ひ、まい日御しゆつしなさるゝ。(将軍の御意) (上巻 24 話)

＊くわうけんみん殿…光源院殿。足利十三代将軍義輝。永禄八年(1565)没。

- ② 将くん是を聞めし、もつともの事にて候へ共、心やすくはなし申たきとの事にて候と、さいさん御ゐあれは、このうへは、ちから及はすとて、御らくたし給ふ。(将軍の御意) (上巻 24 話)

- ③ さるちしき、御こしなされ、御なけきはもつともなれ共、あふはわかれのもとゐにて候、思めしきりたまひて、跡／＼を念比に御とふらひ候へと、けふくんあれは、御ゐのこことく我らも存候へとも、(知識＝高僧の御意) (上巻 24 話)

- ④ 御ゐのこことく、我らかよふては御さらぬ、女どもにあたへ候と、申た。(顔色衰へ、いかにもらうらうとしたる人から竹田法眼へ) (上巻 66 話)

- ⑤ 少も御<sup>ゐ</sup>にしたかうまひ、此申ふん、御心にあたり候は、所の代くわ  
んへ成共、御あけ候へ、（子から養父へ）（下巻5話）
- ⑥ いまよりは老僧したひにして、かう／＼かかんよふそと、仰わたされけ  
れは、御<sup>ゐ</sup>かしこまり承候、（子＝新発意から奉行へ）（下巻5話）
- ⑦ おふせはいかほとそと、とへは、その事にて候、おもてむきは、我／＼  
もすきの道にて候へは、いかやうにも御<sup>ゐ</sup>したひにて候、（傾城〔＝遊女〕  
から客と見込んだ僧侶へ）（下巻58話）

このように「御意」の主体が「貴人」とは言えない場合もあるが、原則として話し手より高位にある人としてよいだろう。

この話の語り手が、ここで「御意」の語を使用させているのも、普段使い慣れない場違いな言葉を使うことにより生まれてくるおかしさを意図していたのではないかと考えておきたい。

### 3. まとめ

『きのふ』の「もみちに点てる」話では、形容詞非音便形が威儀を正す必要がある場での表現にふさわしい文体指標として機能しているのであり、慣れない言葉遣いをしようとして失敗する、その表現を補強するために「御意」「義理」という漢語も援用されている。「御意」が天理図書館蔵古活字十行本では使われていないのに、大英図書館本以降に使われている事実もそれを証明するであろう。『醒睡笑』では、地域による言葉の違いが笑いをうんだ。『きのふ』では、地域の情報を失ったために、言葉遣いそのものから生じるおかしさを補強する必要があったのでであろう。仙波（1983）で論じた、話をより面白くするために言葉を補うということが、この話でも行われているであろう。

参考文献

- 池田廣司・北原保雄（1972）『大蔵虎明本狂言集の研究 本文編 上・中・下』表現社
- 岩淵悦太郎（1942）「醒睡笑と女房詞・東国方言」『日本語』二一七 日本語教育振興会、（『国語史論考』1982年 筑摩書房）
- 岩淵匡他編（1983）『醒睡笑 静嘉堂文庫蔵 本文編』笠間叢書 132 笠間書院
- 岡雅彦（1988）「解説」『きのふはけふの物語』勉誠社文庫 81 勉誠社
- 北原保雄（1973）『きのふはけふの物語研究及び総索引』笠間書院
- 小高敏郎校注（1966）『江戸笑話集 日本古典文学大系』岩波書店
- 小松英雄（1999）『日本語はなぜ変化するか 母語としての日本語の歴史』笠間書院
- 鈴木棠三（1986）『醒睡笑研究ノート』笠間書院
- 仙波光明（1983）「笑話の理解 ——『昨日は今日の物語』の一話を例に——」『徳島大学教育学部 国語科研究会報 第八号』
- 土井忠生訳（1955）『日本大文典』三省堂
- 武藤禎夫訳（1967）『昨日は今日の物語 近世笑話の祖』東洋文庫 102 平凡社